

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

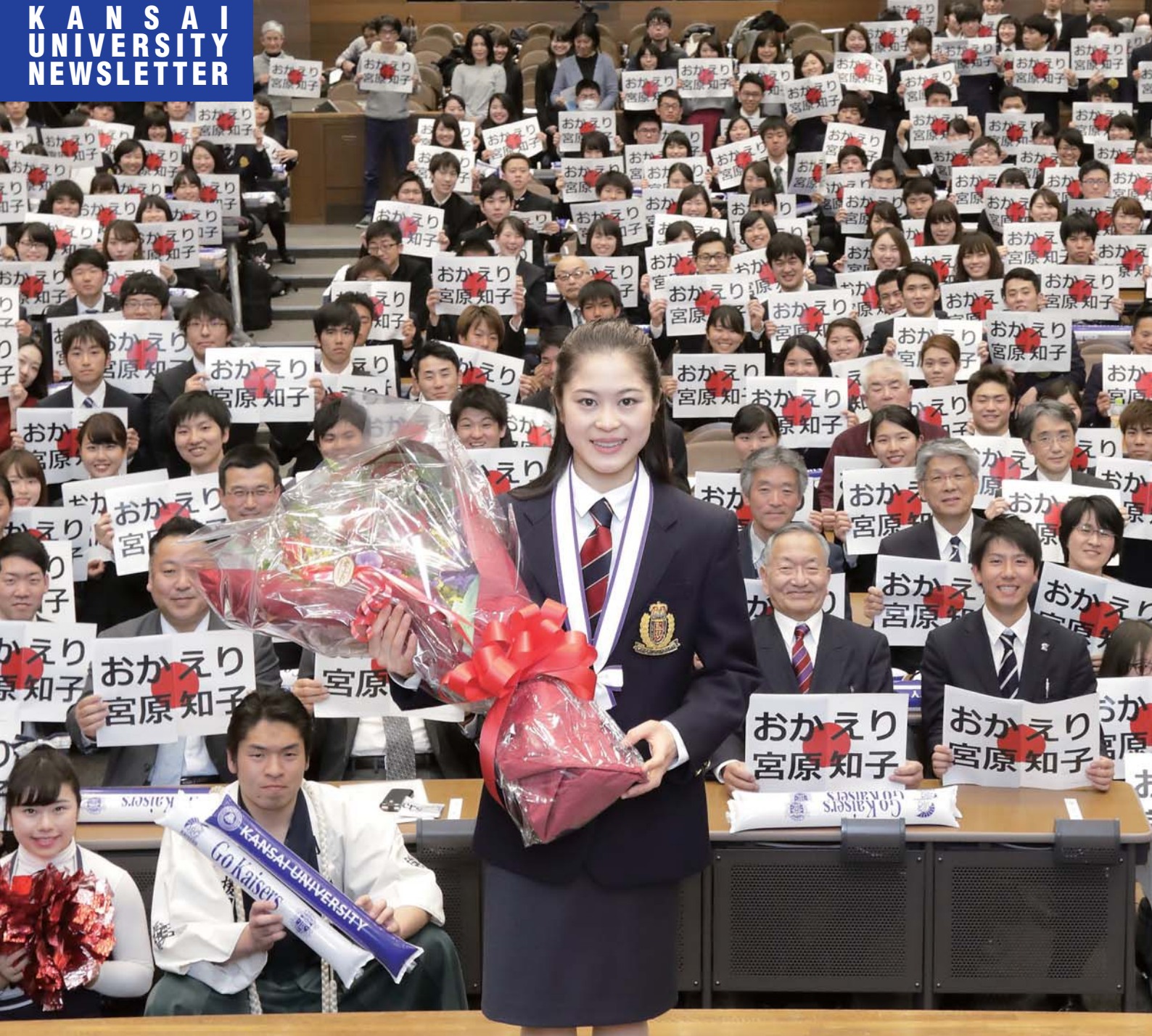
Man is a Thinking Reed.

Reed

No. 52

March, 2018

関西大学ニュースレター
発行日：2018年(平成30年)3月16日
発行：関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
<http://www.kansai-u.ac.jp/>



宮原知子さん (体育会アイススケート部)

感動の舞を ありがとう

学び続ける生き方
大学はあらゆる世代のために

◎キャリアアップの学び

吉松 民雄
池内 啓三
●コカ・コーラ ボトラーズジャパン株式会社代表取締役社長
●理事長



2018年1月、コカ・コーラ ボトラーズジャパンは、傘下にあった東西のボトラーを合併し、年間1兆円規模の売上高を誇る日本一の飲料企業となった。リーダーとして、その手腕に大きな注目が集まる関西大学OBの吉松民雄社長と池内啓三理事長の対話は、社会人が学び続けることの大切さと、そのニーズに応える大学の可能性を示唆するものとなった。



◆会社選びは「鶏口となるも牛後となるなかれ」

池内 私は1965年に大学を卒業し、すぐに本学の職員になりました。学生時代はバスケットボール部に所属しており、職員になってもコーチとして、よくクラブの練習に顔を出していました。吉松さんはバドミントンをされていましたね。当時は体育会40部の半数程度が、関西で優勝するくらい、関大のスポーツが強かったのを思い出します。

吉松 私は池内さんより4年後輩になりますが、私の時代もバドミントン部は黄金期でしたね。2年次からレギュラーとして活躍し、西日本大会で優勝したりもしました。当時はダブルスプレイヤーとして、名前も知られていたほうだと思います。また、副キャプテンを務めていましたので、OBやOGに援助をお願いすることもありました。

池内 そういった接触を通じて、先輩に尊敬の念を抱き、礼儀作法やコミュニケーション力を育てる。それは、部活動の目に見えない効果の一つだと思います。近畿コカ・コーラボトリングに就職を決めたのも、先輩が入社していたからですか？

吉松 当時の近畿コカ・コーラボトリングはエリアも2府1県だけの小さな会社でしたが、「鶏口となるも牛後となるなかれ」という父の教えもあり、成長途上の会社を選ぶほうがいだろうと飛び込みました。ビジネスモデルがシンプルで、スポーツしかしていなかった私でも、入社後に勉強すればすぐ追いつけるだろうという考えもありました。

◆広く事例を学び、現場のほやきを解決

吉松 入社当時の仕事は、ルートトラックに製品を積んで納品し、空容器を回収するだけでなく、営業から広告活動まで何役もこなし、毎日夜遅くまで汗水を流していました。私は体力には自信があったので、重たい瓶も頑張って運び、成績は誰にも負けませんでした。

そして、セールスマン、ルートマネジャー、チーフマネジャー、所長と、現場でほぼ20年間奮闘しました。しかし、当時は時間管理もずさんで典型的な3K職場でしたから、どんどん社員が辞めていきました。そこで新しい仕組みを提案し、自分の営業所に導入しました。

簡単に言えば、お得意さまを効率的に回る訪問計画などをコンピューターで自動作成し、一人ひとりに1日の作業を割り当てるシステムです。まだ業界の中でどこも導入していなかったこのシ



ステムによって、社員の作業が時間通り終わるようになりました。結果、私の営業所は社内で一番稼ぐようになり、私はこの成功事例をきっかけに、本社へ呼ばれました。

池内 当時は為替変動も日本の企業行動に大きな影響を与えていました。生産の合理化、コストの節減などの対応に迫られる中、いち早く業務改善に最新技術を取り入れたのが、一步前になることにつながったわけですね。

吉松 本社に行ってから自動ピッキング設備を作ったり、物流の自動化を進めたり、物流企画課長の時にはロジスティクス大賞という大きな賞をいただくことができました。

実はこの新しいロジスティクス構想を提案した際、当時の社長は「他の事例をしっかり学べ」と、私を日常業務に縛られず自分の考えで自由に行動して学べる、いわゆる“ぶらぶら社員”にしてくれました。私はヨーロッパ、特に北欧を見て回りました。

北欧がなぜ良いかというと、短時間労働をはじめ、働く環境についての厳しい条件が課せられていたからです。例えば、従業員は腰より上に一定以上の重量物を持ち上げる作業を禁じられていました。そのような中では、機械化、自動化するしかありません。参考になる素晴らしい事例がいろいろありました。

私が出かけたことは単純で、現場の社員のほやきを解決したかったのです。働く環境をこのままにしていたら、将来、誰も働きに来なくなるという危機感をずっと持っていました。

◆人生100年時代、大学で学び直す

池内 キャリアアップしていく中では、ご自身の能力を高めていかなければならなかったはず。それはどのようにしてこれたのですか？

吉松 私の場合は自己啓発が中心でした。本を読んだり、自費で研修や通信教育を受けたり。学生時代にそうした勉強はしていませんでしたから、伸びしろは十分ありました。休日や、寝前のちょっとした時間、娘の習い事の送り迎えの待ち時間などを活用していました。

池内 関西大学では社会人が学ぶ環境の充実を図っています。大学にとってこれからの大きな課題の一つは、社会人をどれだけ受け入れられるかだと私は思っています。

人生100年の時代、20年教育を受けて、40年余り働き、定年後の人生を迎えるというかつてのようなワンパターンな生き方が当たり前ではなくなってきています。では、長寿化によって延びた人生の時間をどう元気に、どう社会と関わって生きるのか。そ

■対談



組織のトップに立ったとしても、時代の変化の中で自分に足りないものを補わなければならない、そういう学びはずっと続きます。

吉松 民雄 (よしまつ たみお)
1947年山口県生まれ。69年関西大学経済学部卒業後、近畿コカ・コーラボトリング株式会社入社。2007年同社代表取締役社長。10年コカ・コーラウエスト株式会社代表取締役社長。06年頃より、国内ボトラーの事業と組織の統合を中心となって推進し、17年より現職。17年4月、コカ・コーラウエスト株式会社とコカ・コーラウエストジャパン株式会社の統合が実現、その経営トップとして日本最大の清涼飲料企業を率いる。コカ・コーラ ボトラーズジャパンホールディングス株式会社代表取締役社長も兼任。

れを考えた時、選択の幅はもっと広がっていくと思われま。会社に勤めながら学び直し、時には別の道に進む、あるいは自分のキャリアや資格を生かして起業することもあり得ます。そのため学び直しや新たな知識を求めるニーズに応える学びの場を、大学が提供していかなければならないでしょう。

関西大学梅田キャンパスでは、社会人向け大学院教育や公開講座など、学び直しの機会を提供しているほか、起業をサポートするスタートアップ支援事業を展開しています。開設から約1年で1200件以上の起業相談を受け付け、30社ほどが創業しました。また、千里山キャンパスのイノベーション創生センターでも、産学官連携による共同研究や起業支援に取り組んでいます。近く、ベンチャーキャピタルを立ち上げ、資金面の起業支援も強化していく予定です。このような試みは、私学ではほとんど例がないと思われま。

ただ東京に比べて大阪は、社会人の受講生集めに工夫や企業の協力も必要だと感じています。御社の社員の学びについてはどの

ようにお考えですか？

吉松 社員に対しては、「今、確立された強い個が求められている」という話をしてしています。それは、自ら考えて積極的に行動し、結果に責任を持つこと。結果を分析し、次の仕事に生かす能力をしっかりと身に付ける必要があります。各自の自己研鑽に加え、人材のレベルアップのために会社として投資していくことの両方が必要だと考えま。

◆経営職が学ぶべきは、歴史と芸術

吉松 一般職、管理職、経営職では求められる能力も学ぶべきことも異なると私は考えています。(下図)

若い一般職ではテクニカルスキルを一生懸命習得する、つまり、実務的な勉強が中心になります。人間力を培うヒューマンスキルはいつになっても必要な能力で、そこに時間やお金、労力をかけることはずっと変わりません。

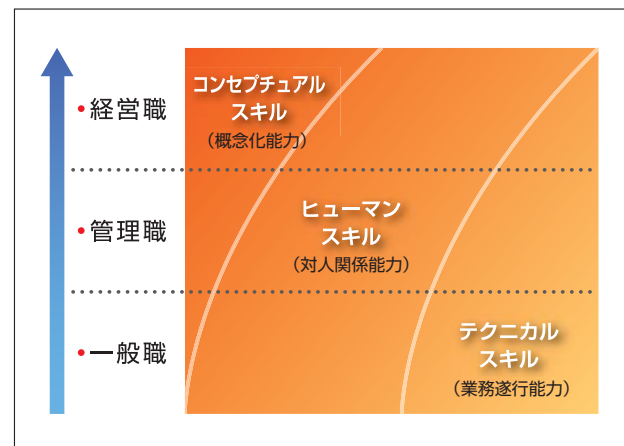
コンセプチュアルスキルは、一般職では企画力を高めることが大切である一方、管理職ではトップが示した夢を具体的な計画に変える構築力が重要で、そして、経営職では夢を描き出し、それを語る構想力が不可欠で、組織の中のポジションによって中身を変えながら、上に行くほど重要性が増していきま。

ただしトップになって、初めて経営職にふさわしいスキルを学ぶのでは間に合いません。上を目指すのであれば、若い時から自分のキャリアプランを立て、自分に何が足りないかをしっかり考え、自己投資をするよう心掛けてほしいですね。

会社としては、意欲的で有望な人材をうまく見つけ、水面下で次世代のリーダーを育てるサクセッションプランを動かし、いろいろ勉強させています。同時に当社としてのあるべき人材像を明確に描き出し、社風に合った人材を採用し、次世代へつなげる人材育成を入口から一貫して行っていかなければならないと考えています。

池内 吉松さんの場合は、現場のセールスマンから社長まで、それぞれの段階に求められる能力を、うまく磨き上げてこられたように思われま。

吉松 結果的にうまくできたのは、節目節目に必ず私をリードして、育ててくれる人がいたおかげです。ロジスティクス大賞をい



ただいた時には、当時の桑原通徳社長から「吉松、おまえはもう勉強しなくていい。専門書は読むな。これからは歴史を読み。そして芸術に触れろ」と言われま。

歴史からは難関を乗り越える知恵、あるいは新しいアイデアを出すための知恵が得られま。芸術はゼロから構想し、さまざまな作業を通して1つの作品として完成させるもの。その一貫した創作過程は、ビジネスの縮図としても見るができます。今は特に陶芸に関心を持っています。

組織のトップに立ったとしても、時代の変化の中で自分に足りないものを補わなければならない、そういう学びはずっと続きます。
池内 トップに上り詰めたからといって、学びを忘れて「全部自分の言う通りにやれ」と言うような経営者はだめだということですね。

大学は経営者のための学びと交流の場でもあります。経済界や教育界、その他各方面で活躍する校友約46万人を輩出する関西大学だからこそ、卒業生らは世代や業界の垣根を越え、互いに学び合っています。それが本学の強みであり、誇りに思っています。

◆品格を備えたエクセレント・カンパニーを目指す

池内 吉松さんはコカ・コーラウエストにおられた頃、健康食品メーカーのキューサイを子会社化されま。健康意識の高まりを早くから察知し、青汁など、より意識の高い世代からの支持を得ていたキューサイに着目されたことは、実に先見の明がおりだと感じております。今後、会社をどうしていきたいとお考えですか？

吉松 飲料事業では日本一を達成しま。達成したところから、また新しい夢が生まれていま。それは世界ナンバー1のボトラーになるという夢。規模が世界一になるだけでなく、品格を備えたエクセレント・カンパニーになること。事業を通じて社会の持続的発展につながるように、CSR(企業の社会的責任)やCSV(共通価値の創造)を高いレベルで果たしていきたい。

世界では飲料の大半が炭酸飲料で、お茶などの非炭酸の割合は低い。日本だけはそれが逆ですが、今後は世界の市場が日本的な構造になると思われま。

コカ・コーラシステムは“ピバレッジ・フォー・ライブ”をテーマに、人々の一生と日々の暮らしに寄り添う飲料を提供していま。小さなお子さまから年配の方々まで、幅広い年代のニーズに応える製品とサービスを提供し、世界に飲料事業のモデルを示していきたいと考えていま。

池内 リーダーとして吉松さんの役割はますます重要になりそう。社長として心掛けていることはありますか？

吉松 自分のスタイルとして決めていることが4つあります。1つ目は目標をしっかりと示す。それも情熱的でやる気をかきたてるような目標。2つ目は先頭に立つ。最前線で最も強い風を受けるのは、社長でなければいけません。何をすることも一番厳しいところに身を置くこと。3つ目は決めて責任をとること。社員の挑戦を、「責任はとるからやりなさい」と、社長が担保しなければいけません。4つ目は自分の言葉で伝えること。この4つのスタンスで、いつも皆の前に姿が映るようにするのが、社長としての

関西大学梅田キャンパスでは、社会人向け大学院教育や公開講座など、学び直しの機会を提供しているほか、起業をサポートするスタートアップ支援事業を展開しています。



池内 啓三 (いけうち けいぞう)
1943年旧満州(中国東北部)生まれ。46年日本に引き揚げ、大阪府に住む。65年関西大学文学部新聞学科を卒業し、学校法人関西大学に奉職。92年評議員。96年総務局長。2000年理事。法人本部長、常務理事、関西大学幼稚園長を経て、08年専務理事、12年理事長に就任。

今の私の指針です。

池内 吉松さんには客員教授として政策創造学部の特別講義もいただいています。もっと多くの学生に話を聞かせてやりたい。先輩たちの成功体験は学生にとって、やはり刺激的で魅力があります。ぜひ、今後も協力をお願いします。

吉松 ありがとうございます。アトランタでコカ・コーラの販売が始まったのが1886年。関西大学の前身、関西法律学校の設立も1886年。コカ・コーラと関西大学は、私にとって、何かの縁があったのだろうと勝手に思っています。

池内 大学を取り巻く環境は、今後も大きく変化するでしょう。全てが流動的な時代であるからこそ、ぶれることなく建学の精神にのっとり、大学の使命をしっかりと果たしていきたいと考えています。最後に、関西大学に期待することがあればお願いします。

吉松 体育会出身者としては、関大スポーツがより活発になるよう取り組んでいただき、元気に社会をリードする後輩を一人でも多く育ててくださるようお願いします。

LEADERS NOW!



現実世界に 数学を

ハッカソンデビューから快進撃

●システム理工学部 4年次生
加藤 美咲さん

ソフトウェアやサービスを開発し、アイデアと技術を競い合うITコンテスト「ハッカソン」の舞台で、存在感を発揮する加藤さん。「現実世界に数学を落とし込みたい」との思いをアイデアに乗せ、快進撃を続けている。

加藤 美咲—かとう みさき
■1995年、大阪府堺市生まれ。システム理工学部数学科4年次生。大学3年次の12月にハッカソンに初めて挑戦し、その後1年間で11大会に出場し、数々の賞を受賞。特技はクラリネット、趣味はモノ作り。座右の銘は「好奇心に嘘をつかない」。

澄んだ陽光が差し込む梅田キャンパス「KANDAI Me RISE」の2階のテーブルに、戦利品がずらりと並ぶ。ハッカソンで数々の賞を受賞している加藤さんは、「大会の賞状や作品などはすべて記念にとっています。就職活動にも役立ちました」とにっこりと笑った。大阪港開港150周年記念イベント「フェリーハッカソン」で奨励賞を受賞した「コンパスバンド」を手に、「ハッカソンのお陰で今まで知らなかった世界と出会うことができ、思考の幅が一気に広がりました。この作品は100円ショップで購入したバンドのお弁当箱に電子コンパスを内蔵したもので、フェリーのデッキから見える景色を案内するデバイスなのですが、絶対に可愛いと思うほうが良いと思って」と少し照れくさそうに語った。

ハッカソン(hackathon)とは、「hack」と「marathon」を組み合わせた造語で、IT、ロボット分野などのエンジニアやデザイナー、そしてプランナーなどが集まり、与えられたテーマに対して短期間でアプリケーションや新しいサービスを開発するイベントのこと。大手企業や自治体が出資対象としたり、ベンチャーキャピタルの出資対象としたりするケースが多く、参加者も学生から社会人まで幅広い。加藤さんは電気通信工学研究会の仲間を誘われて、3年次の12月にハッカソン初参加となる「Hack U 2016」に挑んだ。カメラで英単語を認識し、自動で翻訳する機能に加え、単語テストも作成できる英単語学習のスマホアプリは、見事優秀賞を受賞。デビューからわずか1年間で11大会に出場し、9大会で数々の賞を獲得するなどプランナーとしての存在感を発揮した。

企画やアイデアを担当するプランナーとして出場する加藤さんは、「与えられたテーマに対して、独創的なアイデアをいかにカタチにするのか、それこそがハッカソンの醍醐味です。職種も立場も違う、見ず知らずの人とチームを組むので、たくさんの新たな発見や刺激が自分を成長させてくれます」とハッカソンへの思いを話す。そんな加藤さんの最も印象に残っている大会は、世界69カ国187都市で同時開催され、約25,000人が参加した大会の大阪予選である「NASA Space Apps Challenge 2017 Osaka」。加藤さん擁するチーム「Earth Ice Sight」は、深刻化する地球の海面上昇問題に対して、被害状況や海面侵略の様子を分かりやすくシミュレーションできるWebアプリ「Blue earth watching」を開発し、優秀賞に輝いた。

アイデアの源は「空想のイメージを立体図形で表すように、現実世界に数学を落とし込みたい」との思いから。プランナーとしてチームリーダーになることが多く、「それぞれの技術や能力を生かすためにも、皆が同じ方向を向けるように空気感を統一させることが一番大切だと思います」と言う。今春からIT企業に勤める加藤さんは、「自分のやりたいことができた4年間でした。特に梅田キャンパスはハッカソンの会場として思い入れのある場所であり、アイデアのヒントを模索している時には、キャンパスの職員

の皆さんが全力でバックアップしてくれました。本当にいろいろな経験を積むことが出来ましたし、関西大学に入学してハッカソンと出会い、人生が変わりました」と目を輝かせた。

◀ハッカソンでプレゼンを行う加藤さん



マイノリティーとの出会いが 今の自分を築いた

戸籍上は男性の敏腕女性弁護士

●北本法律事務所 弁護士
仲岡 しゅん さん —法科大学院 2010年修了—

大阪市北区西天満の大阪地方裁判所界隈に異彩を放つ女性がいる。ワンピース、ジーンズ、時には豹柄の衣装を身にまとい、依頼者のトラブルを解決する。男性として生まれた仲岡さんはトランスジェンダーの敏腕弁護士として、多方面で活躍している。



法律事務所が密集する路地に映える漆黒のワンピースとターコイズブルーのピンヒール。腰まで伸びた黒髪をなびかせながら歩く一人の長身女性に、すれ違う通行人の視線が自然と集まる。世間一般の弁護士のイメージとは対極のオーラを放つ仲岡さんは、「どこにでもいるお姉ちゃんみたいで安心しました」と依頼者さんからよく言われますよ。弁護士にはどうしても堅いイメージがつきまといますから。私は気さくでざっくばらんに接することができる関係性を大事にしています」と笑った。3年目ながら多方面で活躍する敏腕弁護士の仲岡さんは男性として生まれ育ったが、今は女性として生きている。

弁護士を志した理由はマイノリティーとの出会いから。幼少期からアトピー性皮膚炎を患い、言葉の暴力を受けることも少なくなかった。声変わりなどの性差を実感する度につきまとう違和感を抱き過ぎた多感な時期に、差別をテーマとした授業を受けた。「心ない言葉を掛けられる人々などを見て、差別の現実を語る姿にシンパシーを感じました」。大学進学後、人権問題研究サークルに所属し、色々なマイノリティーの人々と出会う中で、「私たちの力になってほしい」との声が多く、「それなら私になってやろう」と一念発起。確固たる目標を叶えるため、関西大学法科大学院に進学したが、そこで厚い壁に直面することに。「性への違和感を克服しようと、あえてひげを生やしてみましたが大変でしたね。司法試験も崖っぷちで、将来への希望が持たなくて本当にし



仲岡 しゅん—なかおか しゅん
■1985年、大阪府河内長野市生まれ。大阪府立生野高等学校卒。大阪市立大学法学部卒、10年関西大学法科大学院修了。学童保育指導員などを経て14年に司法試験に合格し、翌15年から女性弁護士として登録。雑誌「女性自身」でコラム「あなたのトラブルしばいたる!!」を連載。

んどかったです」。ひげを生やした当時の学生証を手に、当時のジレンマを振り返った。

2014年に司法試験に合格後、女性弁護士として登録した仲岡さんへの依頼は交際関係のトラブル、特に女性からの依頼が多い。「離婚をはじめ、性と愛にまつわる案件が多いですね。DV、ストーカー、セクハラなどです。弁護士仲間からは、『しゅんちゃんはやけに濃厚な案件が多いね』と言われますよ」と苦笑いする。印象に残っている仕事は、とある飲食店で法外な請求をされた男性からの依頼とのこと。裁判となると時間もお金もかかるので、「それなら直接お店に行って話をつけよう」と。依頼者と共に状況を整理して、被害金を取り戻したという。そんな正義感溢れる人柄に依頼者は信頼を寄せるのだろう。

本業に加え、より分かりやすく、かつ、大阪弁を織り交ぜながらオチで締めくくるコラムや講演活動など、各方面で活躍する仲岡さんは、「女性として生きることで重い鎧から解放されて、自分を正直に表現できるようになりました。昔は内気で人前に出るのが苦手でしたが、今では周囲からアクティブで気が強い印象を持たれています。マイノリティーもそうですが、依頼者に寄り添えることができる弁護士になっていきたいですね」と気さくに微笑んだ。

■研究最前線

「家族のカタチ」を社会学的観点から研究

現代家族における「オトコの育児」を探る

子育てしやすい社会の実現に向けて

●人間健康学部

西川 知亨 准教授

「夫は外で働き、妻は家事や育児をする」。この形態は、昔ながらの家族の在り方と思われがちだが、実際は近代になって生まれたものだ。家族社会学では、家族は「伝統家族→近代家族→現代家族」の順に展開してきたととらえられており、近代家族の家族観は今や当たり前とは言えなくなっている。夫婦共働きで子育て中の西川知亨准教授は、自らの体験を基に「オトコの育児」について、福祉と社会学の方法論を横断しながら研究を進める。



妊婦さんの生活や行動を疑似体験できる「妊婦体験ジャケット」を身に付ける西川准教授

■さまざまな角度から「オトコの育児」をとらえる

—先生は2016年、共編著『〈オトコの育児〉の社会学—家族をめぐる喜びととまどい』を出版されました。その背景をお聞かせください。



『〈オトコの育児〉の社会学—家族をめぐる喜びととまどい』
工藤保則/西川知亨/山田 容【編著】
ミネルヴァ書房(2016年)

私は大学院生時代以来、シカゴ学派社会学を中心とする社会病理学や社会学史、あるいは現代日本の貧困問題についての研究をしてきましたが、人間健康学部に着任し、社会福祉士の養成課程の授業を担当する中で、これまでの研究を修正・活用した新しいテーマとして家族福祉に関する社会学的研究を始めました。この本の出版はその一環です。福祉、あるいは福祉の方法で人と社会をつなぐ技術である「ソーシャルワーク」は実践を重視する分野ですが、その枠組みに何か補うと良いものがあるように感じます。例えば、コミュニティや社会保障、社会制度までは視野に入れますが、その後にある社会構造や社会変動については軽視されがちです。また、福祉の現場が生み出す力や秩序についてもあまり考慮に入れない。それならば、そうした背後の社会構造や社会変動、あるいは実際に人々の社会生活が営まれる社会的場の秩序を重視する社会学の手法、例えばシカゴ学派の社会生態学の方法などと融合すれば、より良い福祉実践、社会学理論の構築が可能になると思うのです。

この本の執筆メンバーの多くが子どもを持つ子育て経験者。育児に関わる自分の体験に基づいて、夫婦や親子、社会などとの関

係を通し、「オトコの育児」をとらえています。また同時に、社会学自体を学ぶことができる構成にもしています。現代社会は女性も男性も子育てに奮闘している人が多く、我が家も夫婦共同で育児をしています。日々の行いが研究テーマになる「オトコの育児」はとても良い題材でした。

■現代に求められるライフスタイル

—著書の中で、先生は家族の形態について触れられています。時代と共に、その在り方はどのように変容したのでしょうか？

ポイントとなるのは、近代社会になって出てきた近代家族の形態です。その主な特徴は、家内領域と公共領域の分離、愛情で結ばれる家族関係、子ども中心主義、性別役割分業の4つ。近代家族における多くの人々の労働の場は、それまでのように家の裏の田畑ではなく、通勤して仕事場へ通うようになりました。その分、地域とのつながりは弱くなり、よその家とは異なる慣習や文化を持つように。夫婦関係を成り立たせるものは「愛」に変わり、その中心にいるのは子どもになりました。子どもを成長させることが大きな課題になると同時に、子どもは家族をつなぎとめる大きな存在へ。そして、公共領域は男性が、家内領域は女性が担うようになりました。

—そのような近代家族の在り方もまた、現代家族には通用しなくなってきましたね。

そうですね。現在、家族の形態やライフスタイルは多様化しています。人生の考え方はかつてのように、就学、就労、結婚、出産といった、決まったプロセスを経る「ライフサイクル」ではなく、それぞれの人が違う経路をたどる「ライフコース」として移り変わってきています。

例えば、私たち夫婦は共働きで、子育てをしている現代家族という位置付けにありますが、近代家族の影響を受けている面もあ



お子さんと笑顔でツーショット

ります。私も妻も、母親が(ほぼ)専業主婦という家庭で育ち、生まれ育った家族の価値観や規範が新しい家族にも持ち込まれています。しかし、必ずしもそれは現代を生きる私たちの状況には合わないこともあるため、随時すり合わせをし、新たなカタチの家族秩序を構築していく必要があります。現代家族には近代家族とは異なる新しいライフコースが求められますが、モデルがなく、女性も男性もどうしたら良いのか分からず手探りの状態です。

■社会学からアプローチする「オトコの育児」

—現代家族の育児は、理想と現実ギャップがあるように思えます。

マクロなレベルで見ても、男性は20世紀後半から育児へ参入したばかりとも言えます。職場のさまざまな問題、賃金格差やジェンダーの問題など、いろいろあって育児休暇が取りにくいのが現状です。行政は、男性の育児休業取得率が低いのは男性の意識が低いからだとして、男性の意識を啓蒙する姿勢をとることもありますが、意識の問題としてのみならず、社会の仕組みなどにも目を向ける必要があると思います。

例えば、「イクメン」という言葉が流行っていますが、その言葉にはどこか洗練されたイメージがあり、育児の大変さは見えてきません。男性による育児は、推奨されるばかりで実際は参入しにくい環境のまま。その概念に内在する問題には社会も無頓着です。私を含め、うまくいかないのは自分の育児能力が足りないからなのかと悩む方もいるでしょう。—では、原因はどこから来ているのでしょうか。職場の理解をはじめ、雇用形態や経済状況などさまざまです。育児の問題は個々の問題だけでなく、それを取り巻く社会にも深く関わりがあるのです。

—個人や家族の問題だと思っていた状況に社会学的な視点を取り入れることで、社会全体の問題が見えてくるかもしれないということですか？

そうです。社会学は視点をシフトできる学問であり、シフトすることで個別の問題から解放される部分があります。特に近代家族と現代家族のすき間の時代にいる現代の私たちは、「オトコの育児」を通して「社会学」し、社会学を通して「オトコの育児」に



▲福祉と健康コースの「相談援助演習」の授業などで活用されている大型絵本「ソーシャルワークは、子どもを対象として行われることも多い」



講義中にポインターとして使用している「ピコピコハンマー」▶



について考え、育児をはじめとした社会生活に生かすことができたら良いなと思っています。またこうした物の見方は、育児に限らず、個人の責任とされがちな貧困やブラック企業の問題など、人生のさまざまな場面で生じる課題に立ち向かう武器にもなり得るため、自身や周りの人たち、ひいては社会のために役立つはずだと思っています。

—先生は、実際に保育施設で「オトコの育児」について考える学習会を開催されています。反応はいかがでしたか？

学習会は保育施設からの要請を受け、「〈オトコの育児〉から育児を考えよう!!」をテーマに実施しました。啓発的な会にはしたくなかったのですが、男性そして女性が育児を行う中で経験する問題を、社会的あるいは社会的背景との関係から考えるワークショップ形式で行いました。父親はもちろん、母親や保育士の方にとっても興味深いテーマだったようで、「日々のケアワーク(育児・保育)に必死で、こういう視点でとらえたことがなかった」「育児がしづらい背景に何があるのか考える機会になった」等の感想をいただきました。それぞれの経験から問題を立ち上げ、社会学の視点から前向きに育児を考える一つのきっかけになっていたら良いなと思っています。

—今後の展望をお聞かせください。

今後は自身の子どもの成長を見守り、育児をしながら、これまで私がやってきたシカゴ学派や貧困研究といった理論的・実証的研究を生かして考察し、さまざまな社会や福祉の現場にフィードバックしながら社会学のソーシャルワークの方法を開発したいですね。先にも述べましたが、社会学の概念を用いれば、福祉の視点だけでは気付かないような潜在的な課題に気付くことができると考えています。これまでの研究をベースに、福祉のフィールドへ社会学の概念を組み込み、一つの価値観にとらわれない、現代社会に合った仕組み作りについて考えていきたいと思っています。



研究最前線

沿岸構造物のリスクを分析

危険性の高い施設を効率的に抽出する耐震診断システムの開発

●社会安全学部
一井 康二 教授

1995年。阪神・淡路大震災の悲しみを乗り越えようと、神戸の町は急ピッチで復興に向けた作業が進められていた。同年4月から国の港湾技術研究所に勤めていた一井康二教授も、被災した神戸港の調査や被災施設の復旧に従事していた。その経験を基に、多様な構造形式に対応したチャート式耐震診断システムを開発。地震に対する危険性が高い施設を「簡単に」「早く」「安く」抽出することを可能にした。2017年に社会安全学部に着任。建物倒壊の方向を予測するなど、見えない将来のリスクを「見える化」する研究に挑戦中だ。



研究室の棚には土木学会技術開発賞など数々の受賞盾が並んでいる



簡単に、早く、安い、耐震診断を可能に

先生が開発された沿岸構造物の耐震診断システムが、日本中で活用されているそうですね。

堤防などの沿岸構造物の耐震性を「簡単に」「早く」「安く」診断できるチャート式耐震診断システムを、国土交通省近畿地方整備局のプロジェクトとして開発しました。そのソフトが民間を含め、各地の自治体などに貸し出されて、広く利用されています。このシステムの開発で、2008年度土木学会技術開発賞などの賞もいただくことができました。

具体的にどんなシステムですか？

阪神・淡路大震災以降、地震発生時に沿岸構造物がどのぐらい変形するかを予測する、高精度のシステム開発が進みました。しかし、技術者が構造物ごとに複雑なシミュレーションを実施して算出する必要があるこの方法では、多くの時間と費用がかかります。例えば、大阪府が管理する海岸線は約70キロありますが、全部診断するのは、現実的には非常に難しい。

これに対してチャート式耐震診断システムでは、あらかじめさまざまな条件下におけるシミュレーション結果をデータベース化しておくことで、簡単にスピーディーな診断を可能にさせます。診断の現場では、構造物の大きさや地盤の硬さなどの基本データを入力し、データベースの結果と照合するだけで、その変形量が推定されます。特殊なソフトを使うわけでもなく、専門的な技術者でなくても扱えるという点も大きな特長です。

診断の精度はどうでしょうか？

精度は「まあ、それなりに」という感じになりますが、簡単でコストもかからないから、全箇所でも実施することができます。大切なのは、危険性の高いポイントを見つけ出すことです。全箇所でも実施し、危険性の高いところだけ、従来の高精度システムを用いて診断する。この組み合わせによって、従来よりも時間と費用を節約し、効率的に耐震診断と対策が行えるようになりました。

診断を簡易化するときには注意しなければならないのは、地震による変形を過小評価して、危険を見落としてしまうことです。この見落としの危険性は、解析の精度に大きく影響されますので、コストのかかる高精度の方法を使いたくなります。しかし、傾向に応じて、信頼できるレベルの解析精度が確保できない場合は、変形量を大きめに予測するように調整しておくことで、精度が落ちても見落としは起こらず、実用上の問題をなくすことができました。

また、沿岸の構造物には堤防だけではなく、岸壁や棧橋などいくつかの構造形式があります。多様な構造に対応できるようにするのはちょっと大変でしたね。

いつか必要とされる時のための備えを用意する

チャート式耐震診断システムの今後の課題は？

実際の地震の被害は、地盤の強さなどに大きく影響されます。でも、地面の中は見えないので、地盤の調査をしなければ本当に地震の時に大丈夫なのかわかりませんよね。また、使用環境が悪いと、当初の想定よりも速い速度で構造物が劣化している場合があります。こういった情報をきちんと把握して、より正しく耐震診断を行いたいというのが現在のテーマの一つです。

例えば、構造物の現状を把握するアイテムとして、小型カメラを搭載した改造ラジコンボートを作りました。これで、通常ではダイバーを雇わないと調査できない棧橋の裏側にあるコンクリートの劣化状況を診断するという試みも行っています。

また、地盤を調査する手法として、地面の掘削に使用する建設機械(ミニショベル)の先端部にセンサーを仕込み、土の性質、地面の強度などのデータを取ることにチャレンジ中です。この研究のために建設機械の運転資格も取得しまして、私自身が乗り込んで穴を掘ることもあります。

— そのようなアイデアはどうやって生み出されるのですか？

ミニショベルの場合は、建設機械メーカーから別件の相談をいただいたときに、ふと思いつきました。研究の基本ですが、まず具体的な社会のニーズに対して、何ができるのかを考える。頭の柔らかさには自信があるので、その時の一瞬のひらめきをアイデアにつなげています。特に防災とか危機管理に関連した研究ですと、切迫した事態が起きる前に準備して研究しておくといった、早め早めのニーズ把握が鍵になります。日頃からいろいろなところにアンテナを張っておく必要がありますね。必要に迫られたときに、「こういうものがちゃんとありますよ」と提供できる準備をしておくことが、大学をはじめとする研究機関の役割だと思っています。

「つくる」から、「伝える」へ。

子どもたちへの防災教育にも取り組まれていますね。

以前、土木学会の防災教育に関する委員会で、園児への働きかけが大事だという話になりました。子どもたちは未来を担う存在であり、災害弱者でもある。それに、子どもたちに防災の知識を伝えれば親にも伝わる、という理由からです。そこで、防災絵本『よしお君とでろりん』や、地震が起きたときにどんな行動をすればいいかを歌った曲『地震だ、だんだん』、さらには、災害について子どもが楽しく学べる防災タペストリーを制作するといった



防災絵本『よしお君とでろりん』と絵本を読んだ小学校の生徒からの感想文



災害について楽しく学ぶことができる防災タペストリー



小型カメラ搭載の改造ラジコンボートによる現地調査

活動を携わりました。その他にも関西地震観測研究協議会の皆さんと、地震計を作って防災を学ぶ活動を各地の小中学校で継続して行っています。

— 今後はどんな研究を？

地震発生時には、建物の倒壊によって道路をふさがれ、避難が困難になることも想定されます。建物がどの方向に倒れ、どこがふさがれるのか、それを予測できれば、避難経路をもっとしっかりと考えることができますよね。

近年は空き家も増え、メンテナンスが悪いために地震による倒壊の危険性が高まっている建物もあります。つまり、空き家の倒壊によって周辺住民が避難できなくなってしまうというリスクが潜んでいます。建物倒壊の危険性を「見える化」できれば、公共の安全のための空き家対策の在り方なども見えてくるはず。昨年4月に関西大学に来るまでは、作る、測る、診断するなどの工学的なアプローチが研究の中心でしたが、文理さまざまな分野のスペシャリストが揃う社会安全学部では、法学や経済学などの見地も取り入れて、研究を深化させていきたいと思っています。また、これからは構造物や建物の維持管理がますます重要になってくる時代です。耐震診断や維持管理を通じて、広く社会の安全を支えていける人材の育成にも力を入れていきたいですね。



© 関大スポーツ編集局

●第23回オリンピック冬季競技大会 平昌五輪・フィギュアスケート 女子シングルで 宮原知子さんが熱演!

2月21・23日、平昌五輪フィギュアスケート女子シングルが行われ、体育会アイススケート部の宮原知子さん(文2)が合計222.38点を記録し4位に入賞した。

人一倍練習することで知られる宮原さん。左股関節の疲労骨折により、昨年は世界選手権を欠場するなど苦しんだ時期もあったが、辛抱強くリハビリに励んだ。12月の全日本フィギュアスケート選手権大会では4連覇を果たし、見事復活。念願のオリンピック日本代表選手に選出された。



「夢がなわなかった選手たちの気持ちを背負って、ベストを尽くしたい」と臨んだ平昌五輪。11日の団体戦で氷の感覚をつかみ、ショート4位で挑んだ23日のフリーは、持ち前のしなやかな滑りと深い表現力で「蝶々夫人」を演じ切った。

SATOKO MIYAHARA

7つのジャンプを成功させ、すべての要素で加点を引き出すなど、ショートに続き自己ベストを更新する会心の演技。美しいスピンの締めくくると、両手を力強く突き上げた。「自分のやれることはすべてできました。この場にいられたことを光栄に思いますし、すごく感謝しています」。試合後の言葉通り、リンクに立てる感謝の気持ちが伝わる素晴らしい演技だった。

帰国後の凱旋報告会は約700人もの学生らが笑顔で迎えた。芝井敬司学長からサプライズの金メダルが贈られると「今回の貴重な経験を生かし、さらに高みを目指して頑張っていきたい」と、新たな決意を表明。既に気持ちは、3月19日からイタリアで開催される世界選手権へと向かっており、今後の更なる飛躍に期待が高まる。



© 関大スポーツ編集局

艶やかに 氷上を舞う

Topics ■トピックス [学内情報]

◎ 文部科学省新庁舎エントランスで、企画展示を開催

発見する関西大学 —歴史を発見し、未来を発見しつづける関西大学—



▲(左)企画展示の様子 / (右)高松塚古墳・石室の壁画模型

文部科学省新庁舎エントランス正面(東京・千代田区)において、「発見する関西大学 —歴史を発見し、未来を発見しつづける関西大学—」をテーマとする企画展示を開催している。展示期間は3月27日まで。

1972年、関西大学文学部考古学研究室を中心に行われた高松塚古墳の発掘調査は、日本初となる極彩色の壁画古墳の発見という未曾有の成果をもたらした。本展示では、高松塚古墳の石室空間を再現した原寸大の壁画模型を設置。1300年の時空をさかのぼり、高松塚古墳が造営された飛鳥時代とその美しい壁画世界を楽しむことができる。

また、古墳発見の精神は現在の関西大学のさまざまな研究現場に引き継がれており、その代表的な最先端研究も会場にて紹介。ものづくり分野から医療分野に貢献する関大メディカルポリマー(KUMP: ケーユーエムピー)のプロジェクト成果や、デジタルアーカイブで世界をつなぐ関西大学アジア・オープン・リサーチセンター(KU-ORCAS: ケーユーオルカス)の概要をパネルや映像で展示している。

◎ キックオフ・シンポジウムを開催



「デジタルアーカイブが開く 東アジア文化研究の新しい地平」 —東アジアの過去・現在・未来を考える—

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター(KU-ORCAS)は、2月17日・18日、キックオフ・シンポジウム「デジタルアーカイブが開く東アジア文化研究の新しい地平」を千里山キャンパスにおいて開催した。

関西大学は2017年4月にKU-ORCASを設立。東アジア文化研究に関するデジタルアーカイブの構築、及び社会に開かれたオープン・プラットフォームの形成により、世界最高水準の東アジア文化研究拠点形成を目指している。今回のシンポジウムでは、国内外から招いた研究者による講演をはじめ、最先端かつ最高水準の東アジア研究に加えて、デジタルアーカイブに関する事例紹介・研究報告

飛鳥の歴史を五感で感じられる
体験型ワークショップを開催!

1300年前の古代飛鳥 いにしへの水時計と仏づくりにチャレンジ

3/27 参加費無料 要申込 [会場] 文部科学省旧庁舎1階 情報ひろばラウンジ 東京都千代田区霞が関3-2-2

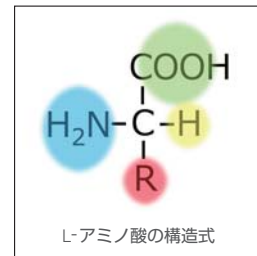
ファミリー・ワークショップ	アカデミック・ワークショップ
<p>▼13:00~</p> <ul style="list-style-type: none"> 四神着ぐるみ歓迎セレモニー 紙芝居(水落遺跡と漏刻) 飛鳥時代ミニ講義 漏刻づくり体験 飛鳥カルタ大会 	<p>▼15:00~</p> <ul style="list-style-type: none"> 飛鳥時代講義 DVD鑑賞 瓦・埴輪(せんぶつ)づくり体験

申込先: 関西大学研究支援・社会連携グループ
kenkyushien@ml.kandai.jp

■社会貢献・連携事業

◎老川典夫教授と三光正宗との共同研究

爽やかな飲み口の「三光 関大和らぎ仕込み特別純米酒」を開発



D-アミノ酸研究のトップランナーである化学生命工学部の老川典夫教授と、岡山備中の酒造会社・三光正宗株式会社が「三光 関大和らぎ仕込み特別純米酒」を共同開発した。

この純米酒は、苦みの元となるレ-アミノ酸を抑えることで、伝統的な山廃仕込みのうまみを残しつつ、フルーティーであと口爽やかな和らいだ味わいに仕上がっている。和食に限らず、洋食、中華なども好相性。ワイングラスでも楽しむとして、従来の日本酒を苦手とする広い層にも好評だ。

老川教授と三光正宗は2016年夏から開発を開始。発酵に時間をかける昔ながらの酒造りの手法である山廃をベースに研究を重ね、仕込みの過程で生成され苦みの原因となるアミノ酸を微生物の力で減らす手法を確立して昨年秋、特許を出願した。

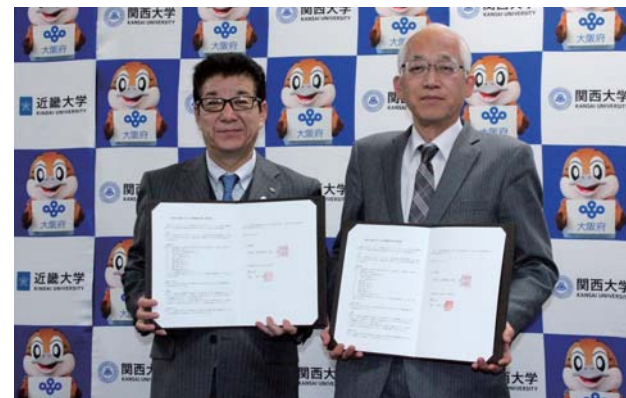
老川教授の専門は、微生物のアミノ酸代謝に関与する酵素の研究であり、その知識を生かして食品中に含まれるD-あるいはL-アミノ酸の種類や量を増減させることによりおいしい食品を次々開



発している。本商品は、「生フルーツ黒酢」に続く第2弾。現在は数量限定での販売。新見、岡山市内の酒販店に出荷され、既に予約で完売に近い状態となっている。

◎大阪府と包括連携協定、河内長野市と連携協定を締結

魅力溢れる都市づくりを目指して



▲左：大阪府 松井一郎知事、右：芝井敬司学長

1月10日、関西大学と大阪府は、地域の活性化と府民生活の向上を図ることを目的に、包括連携協定を締結。今後は地域活性化、教育・研究、子ども・福祉、企業復興など9分野についての連携を強化し、より一層活動を深化させていく。

関西大学は、大阪マラソンへの協賛・参画をはじめ、公開講座・セミナーの開講、百舌鳥・古市古墳群の魅力発信、団地再編モデル事業の推進、北大阪健康医療都市と連携した健康産業の育成など、大阪府や大阪府下の自治体とかねてから連携事業を展開

しており、今回の協定締結を契機に、府域の成長・発展ならびに大学の更なる活性化を推進する。

また、2月20日には、河内長野市、UR都市機構との3者による「南花台地区「丘の生活拠点」に関するまちづくり連携協定」も締結。2016年度からスタートしたUR都市機構による南花台団地の集約型団地再生事業を契機とし、スマートエイジング・シティの形成を目指して、安心、安全、快適に住み続けられる都市基盤の形成などに取り組んでいく。自治体との協定は河内長野市で20例目、自治体以外を含めると31例目となった。



▲(左から)大阪府 山口信彦政策企画部長、芝井敬司学長、河内長野市 島田智明市長、UR都市機構 西村志郎理事、西日本支社長

◎システム理工学部・田實佳郎教授と帝人フロンティアによる共同開発

世界初のファッション性を兼ね備えたウェアラブルセンシング「圧電刺繍(e-stitch)」



▲来場者に技術の特長を説明する田實佳郎教授(中央)

システム理工学部の田實佳郎教授と帝人フロンティア株式会社は、世界初のファッション性を兼ね備えたセンシング技術「圧電刺繍(e-stitch)」を開発し、1月17日から19日、東京ビッグサイトで開催された「第4回ウェアラブルEXPO」にて披露した。

圧電体は、圧力を加えると電気エネルギーを発生し、逆に電気エネルギーを加えると伸縮する特性のある物質の総称。田實教授と帝人グループは、これまで「圧電フィルム」「圧電ファブリック」「圧電ロール」「圧電組紐」を開発し、環境配慮型素材・ポリ乳酸を圧電体として適用する可能性を広げてきた。

この度の「圧電刺繍」は、昨年開発した柔軟で屈曲性のある「圧電組紐」を刺繍にすることで、センシングのためにセンサーを装

着するという従来の概念を打破。さまざまな刺繍パターンを解析し、用途に応じたセンシング特性を発揮させることで、従来のセンシングデバイスにはないファッション性を兼ね備えたウェアラブルセンサーを実現した。

会場には、「圧電刺繍」を用いたレディースウェアやペットウェア、インソールを展示。また、2月13日から15日にフランス・パリで開催された世界最大のファッション素材見本市「ブルミエール・ヴィジョン」にも、「圧電刺繍」開発の元となった「圧電組紐」が展示されるなど、幅広い用途へのセンシング技術の利用に世界中から注目が集まっている。



▲ファッション素材見本市「ブルミエール・ヴィジョン」
▼圧電刺繍(e-stitch)が組み込まれたレディースウェア

◎イノベーション対話プログラム「AjiCon」開催

“おいしい堺”を提案する「SAKAI INNOVATION」堺市の食品会社6社とのコラボによって生み出される新ビジネス



▲奥和義 副学長を囲んで記念撮影

1月17日、関西大学は堺市との地域連携事業の一環として、イノベーション対話プログラム「AjiCon」をサンスクエア堺にて開催した。

このプログラムは、商品開発やビジネスプランについて学ぶ商学部の学生が、さまざまなテーマやニーズ、課題に応じてアイデアを提案し、企業関係者や研究者・消費者との対話を通じて新ビジネスの創出や事業化につなげていくというもの。5回目となる今回のテーマは、「SAKAI INNOVATION～学生の想像が未来の食を創造する～」。学生たちは、特産のあなごや和菓子、パン、惣菜、農作物、無添加LOHAS食材を扱う堺市の食品会社6社とコラボし、新ビジネスの考案に取り組んだ。

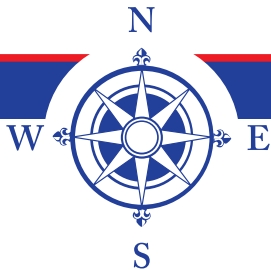
当日は、商学部の荒木孝治教授ゼミ、西岡健一教授ゼミ、千葉貴



宏准教授ゼミの学生12チームが発表。会場には企業関係者ら約150人が来場し、学生の発表だけでなく、フロアとの活発な意見交換も行われた。投票による結果発表では、「美・食・充」をテーマに、アンチエイジング効果が注目される果物「アロニア」を使用したチョコレートのビジネスプランを提案したチームがチャンピオンに選ばれた。

過去には実際に商品化につながったビジネスプランもある「AjiCon」。この活動が「食」にまつわるさまざまな課題解決の一助となることに期待が寄せられる。



KANDAI
■ 関大ニュース

NEWS

梅田キャンパスが中小企業庁より「創業機運醸成賞」を受賞



2月23日、関西大学梅田キャンパス“KANDAI Me RISE”内で展開する起業家育成・支援事業が中小企業庁より「創業機運醸成賞」を受賞した。

支援事業の活動拠点である「スタートアップカフェ大阪」は、梅田キャンパス開設以来、個別相談のみならず、民間企業や公的機関等と連携し、起業家やさまざまな分野の専門家を迎えイベントを開催。多岐にわたるテーマで、参加者の将来のキャリアを考える際に選択肢の一つに「起業」の道があることを示してきた。学生のみならず、会社員や主婦など幅広い層を受け入れ、開設からわずか1年余りで相談者数は1,200人を超え、イベント参加者数は5,100人にもおよぶ。創業数は32社にのぼり、今後ますますの躍進が期待される。

「地域で活躍する若い力」奨励賞を設置し 地域連携活動の公開プレゼンテーションを初開催



関西大学地域連携センターでは、地域連携活動を通じて深く学び、著しくその能力の向上を示した学生を顕彰することを目的に、「地域で活躍する若い力」奨励賞を設置。昨年12月10日、第1回目となる公開プレゼンテーションを千里山キャンパスにて開催した。

当日は、地域活性化や学習支援、防災啓発等に取り組んだ12団体が、活動を振り返って自己の成長を確認しながら、その成果を発表した。最優秀賞を受賞したのは、社会安全学部の近藤誠司准教授ゼミから参加した「校内防災放送プロジェクト～SKH真陽子ども放送局」チームによる取り組み。神戸市長田区の真陽小学校の校内放送を活用した防災情報発信や、地域住民の協力の下、保護者向け新聞「ぼうさいタイムズ」を作成するなど、地域の防災意識向上への貢献が高評価を得た。

第66回全日本大学サッカー選手権大会で 体育会サッカー部が3位入賞



写真提供：関大スポーツ編集部

昨年行われた第95回関西学生サッカーリーグ戦において、体育会サッカー部が4位となり、第66回全日本大学サッカー選手権大会への出場が決定した。3回戦まで主将・竹下玲王さん(社4)を中心に順調に勝ち進み、7年ぶりに準決勝へ進出。12月21日にさいたま市・NACK5スタジアム大宮における準決勝では法政大学と対戦し、試合は1対1のまま延長戦に突入。PK戦の末、1対1(PK2対4)で法政大学に惜敗した。チーム目標の「全員サッカーで日本一」には及ばなかったが、3位入賞という好成績で大会を終えた。

第48回全国高等学校アメリカンフットボール選手権大会で 関西大学第一高等学校アメリカンフットボール部が準優勝



昨年11月26日に吹田市・エキスポフラッシュフィールドで開催された第48回全国高等学校アメリカンフットボール選手権大会準決勝において、関西大学第一高等学校アメリカンフットボール部が立命館宇治高等学校に勝利し、19年ぶりに同大会決勝(クリスマスボウル)への出場を決めた。決勝は12月23日に川崎市・富士通スタジアム川崎で開催され、佼成学園高等学校と対戦。36対16で敗れたものの、栄えある準優勝に輝いた。

関大の研究力を紹介！ 関西大学ウェブサイトのスペシャルサイトに、教員や学生の研究力を伝える新しいサイトが加わった。

<p>関大研究 STORIES</p> <p>理工系の教員にスポットをあて、研究内容をより分かりやすく紹介。</p>	<p>KANDAI RIKEJO</p> <p>理工系女子(リケジョ)たちの思いや描く未来など、内に秘めたストーリーを紹介。</p>	<p>関西大学ニュースレター「Reed」— 研究最前線</p> <p>当誌「Reed」で紹介してきた最前線の研究情報を紹介。</p>
--	--	--